

三性説の説述意図

——『菩薩地』第4章「真実義品」を中心に——

桑 月 一 仁

本研究は瑜伽行派がなぜ三性説 (trisvabhāva, trilakṣaṇa) を説述したのか、その意図を明らかにするものである。三性説とは (1) 遍計所執性 (parikalpita-svabhāva)、(2) 依他起性 (paratantra°)、(3) 円成実性 (pariṇiṣpanna°) という3つの概念によって構成される瑜伽行派独自の教義であり、論理的整合性を持って定義付けられている。文献によって少しずつ定義に違いが見られるが、それらの比較検討や内容の変遷についてはすでに十分に考察されている。しかし、そもそもなぜ三性説が説述されたのか、どういう意図や理由があって説述されるに至ったのかは、いずれの文献にも説明がないため、三性説の形成には多角的に複数の影響があったであろうと漠然と指摘されるにとどまっている。

しかしこのような研究状況の中、『菩薩地』第4章「真実義品」に見られる (1) 仮設の語 (prajñaptivāda)、(2) 仮設の所依 (*prajñaptiśāya)、(3) 法性／真如 (dharmatā / tathatā) という3つの概念が、三性説が形成される以前の萌芽的思想を示していると指摘されている。なぜなら、これらが (1) 遍計所執性、(2) 依他起性、(3) 円成実性の内容にそれぞれ対応し、3つの概念からなる構造も一致しているからである。そしてこの萌芽的思想には従来『中論頌』の二諦説が影響を与えていると指摘され、さらに両文献には空性が虚無論とみなされてしまうことを危惧する共通の問題意識があるとも指摘されている。そこで本研究では、まず『中論頌』から「真実義品」への影響を再検討する。次に、萌芽的思想が見られる「真実義品」の文脈を確認し、さらに『菩薩地』の空性解釈や無自性解釈を検討することで思想背景を明らかにし、萌芽的思想の意義を考察する。最後に、文献史上はじめて論理的整合性を持って三性説が説述される『解深密経』が、どのように萌芽的思想を受容したのかを検討し、三性説の意義を考察する。以上によって三性説の説述意図が明らかとなれば、瑜伽行派の思想史上に三性説の起点を明確に位置付けることができるようになる。また、「真実義品」の萌芽的思想はいまだ唯識 [性] (vijñaptimātra[-tā]) とは結び付いておらず、實在論的な思想であると指摘されているが、後代になると三性説は唯識 [性]、虚妄分別 (abhūtaparikalpa)、アーラヤ識

(ālayavijñāna) などの概念と結び付いて認識論的な性格を帯びるようになる。このように三性説の内容が展開する理由を解明する一助となることも期待される。

以上の結果として主に以下のことを指摘した。はじめに、従来指摘されている三性説の「萌芽的思想」に代えて、構造上の対比を単純化するために (1) 仮設の語、(2) 仮設の所依、(3) 勝義的実在 [である vastu] (paramārthasadbhūta[-ṃ vastu]) という 3 つの概念から構成される「萌芽形態」を新たに規定した。その上でまず、『中論頌』の二諦説のうち世俗諦は有自性に基づく仏陀の教説を、勝義諦は無自性に基づく仏陀の教説を意味しているという解釈の妥当性を指摘した。したがって、そのような教説の分類としての二諦説が、存在論的な概念で構成される三性説の萌芽形態には、直接の影響を与えてはいない。むしろ、有自性と無自性とを巡る思想的立場の違いによって生まれる、存在論的な問題意識こそが影響を与えていると考えられる。このような萌芽形態が見られる「真実義品」の文脈には、自性の有無に関する思想的立場が異なる者として、有自性の立場にある増益をなす者、無自性の立場にある損減をなす者、そして両者の会通を試みる「真実義品」自身の立場という、三者が立てられている。『中論頌』では有自性と無自性との単純な二項対立が見られたが、「真実義品」は自性の下位概念として「言語表現され得る自性」(abhilāpyasvabhāva) と「言語表現され得ない自性」(nirābhilāpyasvabhāva) とを設定し、自性に質的な区別を設ける。そして、一切諸法には言語表現され得ない自性があると主張するが、一方で『菩薩地』の他章では、一切諸法に言語表現され得る自性がないということが「一切諸法無自性」の意味だと規定する。つまり、三性説の萌芽形態は『中論頌』に見られるような、自性があるのか無いのか、という二項対立を止揚し、どのような自性があり、どのような自性がないのか、という発想によって、有自性と無自性の会通を可能にする概念装置としての意義があると指摘した。会通する理由としては、法有説に基づいて有自性の立場にあるからこそ、無自性を虚無論として恐れる声聞乗を大乘の立場から摂取するためだと考えられる。

このような萌芽形態を受容した『解深密経』には、三性説だけでなくそれと表裏の関係にある三無自性説も説述されている。また、『解深密経』の三性説は自性ではなく相 (*lakṣaṇa) でもって定義されるため、『菩薩地』のように有自性と無自性との会通が分かりにくい。しかし『解深密経』には三自性の用例も見られ、三相 (*lakṣaṇa) と三無自性性 (*niḥsvabhāvatā) との対応の背後には、有自性と無自性との会通が見られることを指摘した。『菩薩地』が自性に下位概念を設定したように、『解深密経』は自性に遍計所執性、依他起性、円成実性という 3 つの下位概念を置く。そして、遍計所執なる自性を持つ諸法は相無自性性 (*lakṣaṇa-niḥsvabhāvatā) としては無自性であり、依他起なる自性を持つ諸法は生無自性性 (*utpatti°) と勝義無自性性 (*paramārtha°) としては無自性であり、円成実なる自性を持つ諸法は勝義無

自性性としては無自性である。つまり、『解深密経』においても、三性説には有自性と無自性との会通を可能にする概念装置としての意義が認められる。さらに、この会通の理由も『菩薩地』と同様に、無自性を虚無論として恐れる声聞乗を大乘の立場から摂取するためだと考えられる。

以上から、三性説の説述意図は、大乘においても声聞乗と同様に有自性の思想的立場に立脚しながら、同時に無自性を会通するためであると、本研究は結論付ける。